



Center for American Studies The University of Tokyo
東京大学大学院総合文化研究科附属アメリカ研究資料センター

CAS ニューズレター第2号 目次

The Center for American Studies, the Focus of International Scholarly Exchange David Jaffee — page 1
特集：アメリカ研究セミナー 1997-98
アメリカ研究における視覚資料の可能性 荒木 純子 — page 2
アメリカ宗教のメインストリームとモルモン教 橋川 健竜 — page 3
縫い合わされた記憶 江崎 聡子 — page 4
対立/差異 小林 柔子 — page 5
クレオール文化とミドルクラス 高橋 均 — page 6
資・料・余・滴 エバンス=シューメーカー コレクション 遠藤 泰生 — page 7
研究プロジェクト/公開シンポジウムのお知らせ — page 8



The Center for American Studies, the Focus of International Scholarly Exchange

— David Jaffee

In 1993, I approached my year in Japan as a Fulbright lecturer at the University of Tokyo with great trepidation, being so far from my familiar archives and libraries in the United States. Imagine my surprise to discover the wonderful resources of the American Center at the University of Tokyo campus in Komaba where the library resources, the various scholarly events, and the center's staff were readily available.

The Center and the extended library of the University of Tokyo were indeed important scholarly resources for me. I was satisfied with the strength of primary and secondary sources to nurture my ongoing scholarly appetite for a year; I am someone who haunts research libraries in the US. I know my year in Japan would have been far more difficult and perhaps impoverished without the Center.

The Center's collection not only helped me in my own research. It also enabled me to find ample materials for my undergraduate and graduate teaching that gave me a wonderful flexibility in developing topics and making available materials according to the students' interests. It was impressive that graduate students could find materials for their historiographical and research interests at the center. The American Center made it that much easier to recommend a year teaching in Japan when I returned home and explained that such a wonderful resource existed.

The Center also provided me with a valued scholarly community, in the often hoped for but seldom achieved fashion, bringing together established scholars and students. I recall so many formal and informal exchanges, at the Center and over dinner and drinks elsewhere, with Americanist scholars from the Kanto area as well as visitors from the United States. I, remember for instance, a wonderful afternoon with Larzer Ziff who offered a vigorous paper on Puritanism that sparked an animated discussion, and another panel discussion, with then American Studies President Alice Kessler-Harris on women in the labor market, that engaged comparative issues between the US and Japan. When the time came to give my own talk, a discussion of my current research on material culture of the nineteenth-century countryside, various scholars who shared similar research interests were in the audience. I have returned to New York City to find our exchanges continuing as many students and scholars from Japan pass through or come to study here. Friends who have traveled for

shorter visits, such as to the JAAS meetings, have also enjoyed meeting scholars my family counts among its friends in Japan. And last year the opportunity to return to Tokyo gave me the chance to visit the Center to renew old acquaintances, and also provided a venue for an exciting seminar and discussion of my current work on town settlement and local history in New England. I am grateful to the group, teachers and scholars of early America who may have traveled far despite their busy schedules, that turned out. They gave me valuable discussion and insights that aided me in the final phase of reworking my forthcoming book.

I think the American Center has truly been an important focus for me and many other scholars who are anxious to promote and benefit from international exchange in an increasingly global world. As Americanists, such scholarly and personal exchanges are important in broadening our horizons outward from our traditional nation-centered concerns. International cultural exchanges are a hard thing to do well and the American Center at the University of Tokyo has a distinguished thirty-year history in sponsoring such exchanges.

David Jaffee; teaches history at the City College of New York. He is the author of the forthcoming cultural history . *The People of the Wachusett: The Town Founders and Village Historians of New England, 1630-1860* (Cornell UP, 1999) and has written several articles on the village enlightenment in New England, peddlers and the commercialization of the countryside, and the democratization of portraiture in the rural north after the Revolution in the *William and Mary Quarterly* and the *Journal of American History*.

アメリカ研究セミナー 1997-98

アメリカ研究に
おける視覚資料の
可能性ローゼンツヴァイク
研究セミナー参加記

荒木 純子

1997年6月4日、アメリカ研究資料センター会議室において、ヴァージニア州ジョージ・メイソン大学のロイ・ローゼンツヴァイク教授による二つの講演が行われた。講演の題目は「セントラルパークの社会史(The Park and the City: Central Park and its Publics)」と「CD-ROM デモンストレーション(Digitizing the Past: American History on CD-ROM)」で、時間は教授の口頭発表と質疑応答を含めてそれぞれ2時間程度、参加者は20名を超える多様なバックグラウンドを持つ研究者であった。

「セントラルパークの社会史」は、これまで風景デザインの観点から研究されてきたセントラルパークの歴史を、政治、経済、文化が絡まりあったものとして捉え直す試みであった。公園の「公」の二つの意味、「公共機関に

よる運営」と「一般への公開」に注目し、前者から生まれる政治的、経済的要素と後者からの文化的要素を取りあげつつ、設立当初からのセントラルパークの変遷の分析がなされた。1850年代にフレデリック・ロー・オルムステッドの「田園で人々を教化する」という高い理念のもとで都会の中心に設計されたセントラルパークは、1860年代に入り政策と都市を構成する人々の変化に伴って大衆性を高め、1870年から1914年の間には訪れる人々により興奮が渦巻き利益がもたらされる場所となった。その後、1970年代の市の財政危機で運営が私設の管理機関に移されて以来、現在のような大きな財産的価値が付与される場所となる。教授はその時代時代の絵や写真を多数スライドで映しながら、この過程を視覚的にもわかりやすく実証した。発表



[左] Prof. Roy Rosenzweig(George Mason Univ.)



Roy Rosenzweig, Stephen Brier, *Who Built America? From the Centennial Celebration of 1876 to the Great War of 1914*, ver.1.0.1(The Voyager Co., 1993).
ニューヨーク市立大学American Social History Projectによる同タイトルの本をベースに製作されている。



FRONT PAGE

アメリカ研究資料センター、
国際研究交流の拠点

デイヴィッド・ジャフィー

フルブライン講師として東京大学で過ごす1993年は私には不安なまま迎えました。慣れ親しんだアメリカの図書館や図書館から離れることを案じたからです。そのため、東大駒場キャンパスのアメリカ研究資料センターで素晴らしい資料の数々を見つけたときの驚きは計り知れないものでした。同センターでは、図書資料の利用のほか、様々な学術的催しやセンタースタッフのサポートが提供されていたのです。

同センターおよびその他の東大附属図書館は私にとって本当に有益なもので、一年間に渡って学術的欲求を維持するに足る一次・二次資料に大いに満足しました。これは、アメリカの研究図書館を渉猟している私の感想です。もし同センターがなければ、日本での私の一年間は実際よりずっと困難で貧しいものであったに違いありません。

同センターが所蔵するコレクションの役割は、私のリサーチワークへのサポートにとどまりませんでした。私自身が学部生・大学院生を指導するのに必要な資料を検索するにあたって、同センターは助けになりました。それによって、学生たちが自らの関心に応じてとても柔軟にピックを発展させたり資料を入手したりすることができたのです。大学院生が自身の研究史上の関心、および自分の研究関心にあわせて資料を検索できることは素晴らしいことです。アメリカ研究資料センターの

おかげで、アメリカに戻ったときには、このように素晴らしい資料があるのだから日本での一年間の研究は有用なものだと、気軽に他の人に薦められるようになりました。

加えて、同センターは、非常に有用な研究者コミュニティを我々に提供してくれました。

つまり、通常は期待するけれどももつたに実現することができない、著名な研究者と学生たちの交流を可能にしてくれたのです。同センターで、また時にはそれ以外の場所でも食事をしながら、行われた公式・非公式の研究交流の数々は私は思いがします。その場には、アメリカからの訪問者だけではなく、関東圏にいるアメリカ研究者も含まれていました。たとえば、Larzer Ziffと過ごした素敵な午後のことや、当時のアメリカ学会会長であるAlice Kessler-Harrisを交えたパネルディスカッションのことをよく覚えています。Larzer Ziffは、ピューリタニズムに関するペーパーを提出して、活発な議論を巻き起こしました。そして、Alice Kessler-Harrisを交えた労働市場における女性に関するディスカッションでは、日米間にある争点の比較に議論が集中したものでした。19世紀農村のマテリアル・カルチャーについて私自身が講演をした際には、同様の研究関心を持つ多くの参加者を得られました。

NY市に戻って判ったことは、多くの日本からの研究者や学生が、ここを訪れたり滞りつつ研究交流が続いているということでした。日本アメリカ学会年次大会への参加など短期的な目的で訪日した私の友人たちも、私の家族と親しい様々な研究者と東京で交流する機会を得ました。昨年、私は東京へ行く機会に恵まれ、センターを再び訪れて旧交を温めると共に、私の最近の研究であるニューイングランド地方史とタウン・セッルメントについてのセミナー

も行いました。参加して下さいましたアメリカ研究者・教官に感謝しています。後で知ったことですが、中には多忙なスケジュールをおして遠方より参加してくれた人もいたようです。そのときに得た価値ある議論や洞察は、まもなく刊行される私の本を練り直す最終段階にあたって大きな助けとなりました。

日々、グローバル化している世界のなかで、国際交流の促進を願ひ、そこから恩恵を得たいと願う私や他の多くの研究者にとって、アメリカ研究資料センターは本当に重要な拠点となってきました。アメリカ研究者として、このような学術的・個人的交流は、それまで強固にあった国家中心的な関心からわれわれの視野を解き放つ意味でも重要なものです。国際文化交流を進めるのは困難を伴うものですが、アメリカ研究資料センターと東京大学はそのような交流を支えてきた特筆に値する30年の歴史を持っているのです。

訳: 村田勝幸(むらた かつゆき・サザンカリフォルニア大学)

デイヴィッド・ジャフィー: ニューヨーク市立大学教授(歴史学) ニューイングランドにおけるディアスポラ文化史についての著書 *The People of the Wachusett: The Town Founders and Village Historians of New England, 1630-1860* (Cornell UP, 1999) がまもなく刊行される予定。ニューイングランド農村の啓蒙、行商人と農村の商業化、革命後の北部農村における肖像画の民主化などをテーマとした論考が *The William and Mary Quarterly* 誌や *The Journal of American History* 誌に掲載されている。

後、環境問題、大衆文化、美術史などの専門家から質問が出て、活発な議論が交わされた。

「CD-ROMデモンストレーション」は、教授自身が作成に携わったアメリカ史教育用CD-ROM、「Who Built America?」の実演と並行して行われ、電子化された一次史料という新しいメディアを通してのアメリカ史教育の可能性が示された。電子メディアの利点

膨大な量の情報が収められる、目だけではなく耳からの情報もあわせ歴史を「体験」できる、各利用者の進捗で学習できるを教授は指摘し、それらの史料がふつうのアメリカ人に「声」を与えることで、過去をより深く理解し、より多彩に描くことができるという点を強調した。参加者はそのCD-ROM（アメリカ史に関わる5000ページ分の本、700枚の絵、60の図表、4時間半の音声、45分のフィルムを収納）と新しいメディアの可能性に圧倒され、実際にアメリカ史教育に携わる人だけでなく、熱心な学部1、2年生やNHKの関係者、情報処理関係者などからも数々の質問があり、会議室全体が熱気に包まれていた。

ローゼンツヴァイク教授の二つの研究講演は、このようにともに視覚的聴覚的資料を用いた「新しい」ものであった。聴衆からの積極的な参加が多く、それに教授の人柄が加わり、たいへん和やかで充実した研究会となった。ただし、日本の現状の設備では、まだ教授の提唱するような研究・教育が生かせないのは、とても残念なことと思われる。

（あらかし じゅんこ・ハーヴァード大学院）

アメリカ宗教の メインストリームと モルモン教

—— シップス研究セミナー
参加記

橋川 健竜

1997年度第3回アメリカ研究セミナーは6月5日（木）主著『モルモンニズム』で知られる、インディアナ大学名誉教授ヤン・シップス氏を迎えた。講演「モルモンニズムとアメリカ宗教のメインストリーム」で、シップス教授は、合衆国憲法の第1修正条項で政教分離を掲げたアメリカが、なぜ19世紀に国家をあげてモ

ルモン教を攻撃したのかを問うた。モルモン教は旗揚げ当初には攻撃されなかった。その教義が、宗教・社会生活の規範に関する社会の認識と次第に相容れなくなり、攻撃されるにいたったのである。

団体としてのモルモン教は、教祖ジョセフ・スミスが『モルモン経』を翻訳、出版し、自らを大背教いらい再建されていなかった真の教会と神権を回復するキリスト教会である（第一の回復）と主張した1830年に出現する。この時点では、モルモン教はキャンベル派やその他の自称正統キリスト教集団と同じ扱いを受けた。続いてスミスらは、モルモン教徒の体にはイスラエルの民の血が流れていると主張、自らを神の選民、非信徒を異邦人と位置づけ（第二の回復）独自の自己・他者認識を打ち出す。さらに「全てのものの回復」（第三の回復）では、一夫多妻制が是認され、これはモルモン信徒を独自のエスニック集団にまとめる上で大きな役割を果たした。こうした動きが見られる一方で、アメリカ社会一般では、18世紀の北米植民地を貫いていた家父長的な社会構造が独立革命期から19世紀前半にかけて攻撃され、崩壊しつつあった。この状況下で、モルモン教の教義の発展は、家父長制を復活させる試みとも見えた。社会はモルモン教徒を「他者」と位置づけ、結果としてスミスは殺害される。その後内部分裂を経て、ブリガム・ヤングをいだけ一派（末日聖徒イエス・キリスト教会）はユタへと移住し、第三の回復を拒否する少数派は復興末日聖徒（RLDS）と名のり、ミズーリに残留した。

出席者からは、モルモン教とキリスト教の教義、特にピューリタニズムの選民思想との相違、またエスニック集団としてのモルモン信徒の凝集力、その時期ごとの変遷、などの質問があった。シップス教授の回答の後、司会をつとめた高山真知子教授（江戸川大学）とシップス教授から、アメリカにおけるモルモン教研究の盛況ぶりのレポートと、雑誌『宗教とアメリカ文化』の紹介があった。とかくユタへの移住、ソルトレイク・シティ建設、そして一夫多妻制が強調されるモルモン教を、最初から異端と切り捨てず、その初期の教義と社会一般の認識変化との応酬の中に置くという論法は、基礎的でありながら新鮮で、宗教思想研究の醍醐味を味わえるものであった。休憩もとらずに講演と質疑に応じて下さったシップス教授に感謝の意を表したい。

（はしかわ けんりゅう・コロンビア大学院）



左手より Prof. Jan Shipps (Indiana Univ.), 高山真知子 (江戸川大)

縫い合わされた 記憶

カルチュラル・スタディーズ
そしてアート・ヒストリーにおけるキルト

ターナー研究セミナー
参加記

江崎 聡子

開拓時代以来、主に女性達によって縫い上げられてきた手工芸品であるキルトは、日常生活の実用品、物であると同時に、芸術作品としての美しさを持っている。

近年、カルチュラル・スタディーズにおいては、人間の手によって生産された物に着目し、その物のある特定の時代と場所における生産様式や消費と流通の構造を明らかにすることを通じて、最終的に当時の社会的、文化的状況の考察へと到達するという作業がしばしば行われてきた。いわば、従来の学問的研究においては「小さな」あるいは「周縁的」なものとしてしばしば看過されてきた対象の研究の蓄積によって、「大きな」中心的な物語の再解釈が試みられてきたと言えるだろう。

このようなカルチュラル・スタディーズの動向に少なからず影響を受けた、フェミニズムの美術史家グリゼルダ・ポロックは、その著 *Old Mistresses: Women, Art and Ideology* (1981, London) において、女性によって生産された手工芸品の芸術作品としての再評価をめぐる議論の一例としてアメリカン・キルトを論じている。ポロックはキルト制作や受容のもつ共同体における私的、社会的、政治的、宗教的機能を指摘し、キルトはいわゆるハイ・アートの制作、受容とはことなつたコンテキストにおいて論じられなければならないと考えている。キルトは女性の共同作業によって作り出され、実用品として多くの人に享受され、かつそこには芸術作品としての美しさが備わっているというのだ。ポロックは、キルトを単なる女の手工芸品として軽視することは、あるいはまた、もっぱらそのデザインの抽象性に着目して、従来のハイ・アートの枠組みに強引に組み入れて評価することは、女の歴史、女の芸術作品、女の仕事を抹殺するに等しいと忠告している。キルトのみならず女性芸術家達の作品を評価するためには、男性中心主義的な構造をもつ従来の美術史制度やその言説とはことなる新たなシステムを導入しなければならぬと考えてい

る。美術史の分野においても、従来は芸術作品としてはみなされていなかったような「小さな」対象の研究から、「大きな」物語への挑戦が始まっているのである。

さて、現在、カリフォルニア大学デイヴィス校のアフリカン・アメリカン・スタディーズで教鞭をとるパトリシア・ターナー教授による今回の講演は、主に十九世紀後半以降のアフリカン・アメリカンによるキルトをテーマとしたものとなった。ターナー教授はスライドを豊富に駆使し、一つ一つの作品を丁寧に解説しつつ、また同時に、キルト制作の背後に見られるアフリカン・アメリカンをとりまく社会的、文化的状況に言及することも忘れることはなかった。とりわけ印象深いのは、これらのキルトに見られる非対称なインプロヴィゼイショナルなパターン模様とジャズとの関連性や、奴隷解放運動においてキルトやキルト共同制作の場が果たした機能についての指摘である。後者に関しては、アフリカン・アメリカンキルトのみならず、白人女性によるメイン・ストリーム・キルトの制作現場もまた、奴隷解放運動を支持する一つのコミュニティとして機能していたとの指摘があった。また、キルトが奴隷解放後生計を立てることが困難になったアフリカン・アメリカン達の一収入源として、経済的な意味を持っていたとの説明



左手奥より Prof. Patricia A. Turner (Univ. of California, Davis)、司会をつとめた遠藤泰生助教授(東京大学)



スライドを用い、キルトのデザインについて詳細な解説がなされた。



もあった。

キルトを語ることが、キルトが記憶する場所や時間、そしてそこに生きていた人々の思い出を、さらには歴史を新たに蘇らせることになるならば、そのようにキルトを語ることができれば、カルチュラル・スタディーズやまたニュー・アート・ヒストリーの観点からも、キルト研究は非常に興味深いものとなるだろう。そして、そのような方向性や可能性を示唆した今回の講演は非常に意義深いものであったと言えるだろう。

(えさき さとこ・東京大院)

対立 / 差異

オキヒロ研究セミナー
参加記

小林 柔子

1998年6月8日、アメリカ研究資料センターの会議室においてアジア系アメリカ人研究についての講演が行われた。アジア系アメリカ人研究は近年たいへん注目されており、従来西部の大学が中心だった同研究が東部の大学にも進出しつつある。7月にはハワイ大学でアジア系アメリカ人研究の学会も行われる予定である。このアジア系アメリカ人研究の展開について、コーネル大学の東アジア研究科主任のグリー・オキヒロ (Gary Okihiro) 教授が語ってくれた。

まずオキヒロ氏は、マイリシティとしてアジア系移民が経験してきた差別の歴史、さらには権利の主張と獲得の歴史が、非アジア系のエスニシティの歴史と類似した構造を持つことを指摘した。アジア系移民による権利獲得の動きは、当事者であるアジア系移民の問題にとどまらず、非アジア系移民のアメリカ社会における諸権利にも影響力をもたらすものであったというのである。具体的には、1927年にハワイの日系人が公立学校以外で日本語を使用する権利を得たことが、白人系移民の教育の権利にも影響を与え、中西部ドイツ系移民に学校における母語教育の受容を可能にした例を挙げた。また、アジア系移民2世の公立学校からの排斥を改善する動きが、公立学校における黒人白人の人種隔離教育を違憲とした1954年の最高裁判

決に先立つものであったことも指摘した。

こうした事実にもかかわらず、アメリカ研究におけるマイリシティ研究の主たる対象は最近まで依然として白人系アメリカ人であった。そして白人系アメリカ人の人種認識に基づいた「ラテン系」「日系」という研究対象が研究者によって指定され、同時に白人系の人種認識の難形が反映されるかたちで、それら非白人系の移民の歴史に重要度の序列や、序列に規定された解釈が加えられてきた。各エスニシティの価値が相対的であると捉えるオキヒロ氏は、このようなアメリカ研究の在り方に対し、2つの点から批判を加えている。まず、各エスニシティ間関係が相対的であるという前提から、各エスニシティは研究対象として偏向なく研究されるべきであり、アジア系アメリカ人研究を含めた個々のエスニック・マイリシティの研究に相応の位置が与えられるべきだ、と主張する。次に、これまでの分析から生まれた「ラテン系」や「日系」という研究対象については、偏向が潜在する視点から析出されたその対象の分析妥当性を再検討する必要があると指摘する。以上の批判から、オキヒロ氏は、対立 / 差異という分析視角からエスニシティを分析しようとする。白人中心主義の再定義に陥りがちな多文化主義を包摂するコンセンサス史学以来の概念を批判的に捉え、対立 / 差異に注目することによってアジア系アメリカ人という対象を指定するのである。

では、対立 / 差異という視点は、どのような有効性を持つのか。対立 / 差異によって分析されるアジア系アメリカ人内部の関係と非アジア系アメリカ人との関係をどう捉えるのか。また、従来の人種認識に基づく「日系」や「ラテン系」という枠組みを否定するのであれば、「アジア系アメリカ人」という対象を指定することで、従来の研究の問題点がどう乗り越えられるのだろうか。新しい視点を導入し、これまでのエスニシティ研究を乗り越えようとする課題設定はアメリカ研究にとどまらず、エスニシティ研究者全体にとって魅力的な問題設定である。だからこそ、相対的な関係性を前提にしたエスニシティの歴史をどう切り取るのかについてさらに踏み込んだ言及が欲しいところであった。これらの疑問を既に検討しつつある日本のアメリカ研究の行方に注目したい。

(こばやし やすこ・東京大院)



[中央] Prof. Gary Okihiro (Cornell Univ.)



セミナー終了後も多くの参加者からの質問が相次いだ



Gary Okihiro, photo by Joan Myers, *Whispered Silences: Japanese Americans and World War II* (Univ. of Washington Press, 1996)

研究プロジェクト・クレオール視点から見た
環カリブ広域移民研究

クレオール文化と ミドルクラス

—— ブラジル、サルヴァドル市の調査から
高橋 均



サルヴァドル旧市街、ペロウリーニョ広場

アメリカ研究資料センターの遠藤泰生さんはじめ、地域文化研究専攻の同僚たちと進めている共同研究で、三度にわたりカリブ諸国とブラジルを訪れる機会があった。研究課題はこれら諸国・諸地域への人間集団の移住とクレオール文化の形成というものであったが、都市から都市へと歴訪してゆくあいだに、この主題は、近年これら地域で着々と進行しているミドルクラス文化の変容との関係において論じる必要があると思うようになった。

ラテンアメリカ・カリブ地域において、世紀転換期に出現した都市ホワイトカラー・ミドルクラスは、当初は政治社会の中で変革勢力であった。すなわちかれらは、ほぼ時を同じくして出現した近代的労働者階級と手をたずさえて、世界不況期以降、積極国家・社会正義・民族主義を旗印とするポピュリズム政治の基盤となった。この時期はまた文化的民族主義の興隆期でもあったから、都市ミドルクラスは、ロウワー・ミドル以下の階層に特徴的なクレオール的(国によってはメスティーソ的)混淆文化を、将来の国民文化の核となりうる要素として、重視し育成していこうとする志向をもっていた。

ところがポピュリズム政治が行き詰まった1960年代から1980年代の債務危機にかけて、都市ホワイトカラー・ミドルクラスとクレオール混淆文化の間に成立していた蜜月的な関係は、従来通りのかたちで維持することは難しくなった。ブラジル北東部サルヴァドル市の都市景観を例にとり、その変化がどのように現れているかを見よう。

サルヴァドル市(人口200万)の旧市街はドス・オス・サントス湾に面して、高さ71メートルの崖の上に建てられている。1549年にブラジル総督府が置かれて以来植民地の首府として繁栄し、立派な18世紀バロック建築の町並みが形成されるとともに、砂糖生産のため多数のアフリカ人奴隷が輸入されたために、民間信仰カンドンブレ、格闘技カポエイラなどを代表的要素とするクレオール混淆文化が発達した。町のこの部分は近年まで荒廃が甚だしかったが、近年観光目的で公



サルヴァドル旧市街、カテドラル側からサンフランシスコ教会をのぞむ

費により再開発され、観光客は安心して散策できるようになり、かれら向けの店舗・飲食店も増えつつある。だがしかしこの周囲は、崖下に発達したビジネス街を別としてロウワー・ミドル以下の居住地区であり、地元のミドルクラスはあまり姿を見せず商売もさびれた感じがする。

ここから海岸沿いに、九月七日通りに沿って南下していくと、坂下のサンベント教会あたりからカンボグランド広場までの2kmほどは、靴の量販店などが目立つロウワー・ミドル向けの商業地区として繁盛している。そこから先は2kmばかりピトリア地区のお屋敷町が続くが、これらのお屋敷は荒廃しているか企業のオフィスになっている。この地区の南端から市街地は内陸に向かって広がる。ミドルクラス向けのマンションが林立し、いずれも敷地と街路の間を鉄柵で仕切り、門前に管理人やガードマンを詰めさせている。この地区の尽きるところが湾と大西洋を仕切る岬のあるバーハ地区であり、ここにはビーチがあるので観光客向けの施設があるとともに、アップ・ミドル向けの高層マンションと、そして城塞のような巨大ショッピングモール「ショッピング・バーハ」が繁盛している。バーハからは東へ約30kmの空港まで大西洋岸と内陸との二筋のハイウェイがあり、それぞれに沿って商業地区を備えた高層住宅地がいくつも開発されている。

特徴的なのは旧市街とピトリア地区のお屋敷町の沈滞であり、「ショッピング・バーハ」と高層住宅の繁盛である。私はこのことは、



バーハ地区、ショッピング・バーハ正面(撮影いづれも高橋均)

住宅にせよ商業店舗にせよ、なるべく多くをひとつの閉鎖空間の中に抱え込むことで、その空間の開口部を警備するコストを大勢で分担し(それは上流階級であっても一世帯で負担するのは容易ではない)一人当たりの分担額を下げようとする志向から説明されるのではないかと思う。モールの出入りにガードマンが立つことは、もちろん犯罪や都市暴動に対する予防措置だが、それ以上に、下層階級に対して敷居が高い感覚を覚えさせることで、ミドルクラスにリラックスできる消費の場を提供する意味がある。この事情はミドルクラスを、今や犯罪や暴力との連想においてとらえられるようになったクレ奥ールの混淆文化から乖離させ、他方で国際的ミドルクラス文化の受容と普及に向けてつきうごかしている。この地域におけるクレオール混淆文化の現状と将来を論ずるにあたっては、その外部にあるミドルクラス文化に起こりつつある今述べた環境変化を、一大要因として考慮に入れる必要があると思うのである。

(この文章は1998年7月15日アメリカ研究資料センター主催の研究会での報告の要旨である)

(たかはし ひとし・地域文化研究専攻、助教授)

資・料・余・滴

エヴァンス=シューメーカー・コレクション

遠藤 泰生

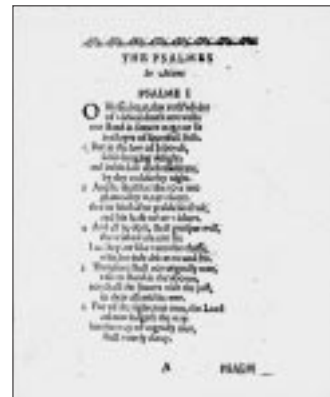
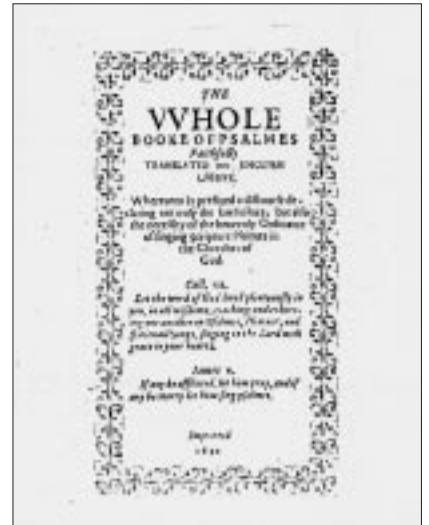
アメリカ研究資料センターには350点を越すマイクロフィッシュ、マイクロフィルム資料が所蔵されているが、そのうち最大の規模を誇るのが、Early American Imprintsである。これは1619年から1820年までの約2世紀のあいだに現在のアメリカ合衆国内で刊行された出版物のほぼ全てを網羅する、壮大な一次資料で、アメリカ近代社会を研究する者なら一度は当たらねばならない歴史資料の宝箱である。収録件名総数は優に10万点を越し、一般にはそのカタログの編者の名前に因み、エヴァンス=シューメーカー・コレクションと呼ばれる。

ちなみに写真は、1640年にマサチューセッツのケンブリッジで印刷された『詩篇全編』のフロントページで、この詩篇は、北米植民地における3番目に古い印刷出版物、現存する印刷物の中では北米最古のものとして研究者の間に知られるものである。当時の植民地総督であったジョン・ウインスロップの言葉を信じるならば、植民地最古の印刷物は、移住してくる植民者が植民会社にたてた恭順の宣誓書(1639?)であり、二番目に古いものは、船乗りが記した同年の暦であるという。移住先の社会の治安に関わる文書と、そこに渡るのに必要な自然条件や年間行事に関する知識を含めたパンフレット、そして詩篇が、もっとも古い三つの印刷物であるところから、いかにも北米植民地の歴史を物語っており興味深い。マサチューセッツのあと、ペンシルヴァニア、ニューヨーク、コネティカット、メリーランド、ロードアイランド、ヴァージニア、サウスカロライナ、ノースカロライナ、ニュージャージー、ニューハンプシャー、デラウェア、そしてジョージアの順で北米13植民地に印刷所が設立されていく。識字率の高さばかりを我々が強く記憶している北米植民地だが、最後のジョージア植民地のサヴァンナに印刷所が開設されたのは印紙条例の危機を3年後にひかえた1762年であったというから、1640年頃から1世紀以上の時間をかけてゆっくりと13植民地に印刷文化が普及していったと考えるのが自然なのであろう。時代ごとの主たる印刷物の内容も、宗教色の強いものから世俗的なもの、さらに政治色の強いものへと変遷し、それにとともに、数人の

知識人の著述から政治団体、グループの主張を伝える著作・パンフレットへと、出版物の形態も微妙な変化を見せていった。最近しきりに論じられる書物の歴史研究がこうした疑問に立ち向かい建国初期の出版文化、知識の在り方を明らかにする日も近い。

この壮大なマイクロ・コレクションが出来上がるきっかけは、1901年にチャールズ・エヴァンス(1850-1935)という人のライブラリアンが、1820年までにアメリカ合衆国で出版された印刷物全ての書誌をまとめる決心をしたことにあった。エヴァンスはその時すでに51歳であったという。予想されたことながら対象出版物の数が膨大であったため作業はなかなか進まなかった。それでもエヴァンスは1904年に最初の3年間の成果をまず第1巻にまとめ出版、さらに1933年までに1799年の分までの調査をおよそ終了し、それを全12巻にまとめ刊行、翌年他界した。そのあと、クリフォード・シブトン、リチャード・シューメーカー、ラルフ・ショー、ロジャー・プリストルらのライブラリアンが彼の遺志を継ぎ作業を継続、署名・著者・印刷所別の索引を含めれば40巻に近い書誌が今の形に完成したのは、実に1969年のことであった。そこに整理された印刷物をほぼ全てマイクロプリント資料におさめる作業が進み、エヴァンス=シューメーカー・コレクションが研究者の手元に供されるようになったのはそれからさらに数年後のことである。また、資料を全てマイクロフィッシュにリフォーマットする作業が1985年から始まり、現在センターが所蔵するような形での資料の刊行が終了したのは1993年のことであった。発表されてから90有余年を経て整ったこの大コレクションを用いて論文を作成する日本の研究者、大学院生も近年増えている。しかし、その有効利用はまだまだこれからである。各種図像に興味のある者、北米内外の政治動向に対し各植民地が起こした行動を探る者、18世紀植民地女性の生活を調べる者、あるいは法令を比較する者、皆このコレクションに向かって失望することは決してない。

(えんどう やすお・アメリカ研究資料センター助教授)



マサチューセッツ湾植民地では、1640年までにすでに60万部を越す聖書が売られたという。しかし、植民地で印刷された聖書(またはその一部)が初めてであった。「マサチューセッツ湾詩篇」と一般には呼ばれるこの本は、1700年までに7版が出版され、英国本国にも輸出された。

研究プロジェクト

「アメリカニゼーションの国際比較」 研究会の発足

油井 大三郎



本年7月より表記の研究プロジェクトが新たに発足しました。近年、日米間の経済摩擦が長期化する中で米国側で「日本異質論」が高まったり、冷戦終結後の世界では「文明の衝突」が常態となるといった言説が注目を浴びるなど、異文化・文明間の摩擦を強調する議論が目立っています。しかし、第二次大戦後の日本は占領下でかなりの「アメリカニゼーション」を経験しましたし、高度経済成長期には大衆文化レベルのそれも顕著でした。それにも拘わらず、戦後50年を経て「日本異質論」が登場してくるのは、異文化間の接触や融合の難しさを示しています。

また、米国内では「多文化主義」をめぐる論争の過程で、WASP文化への同化強制という意味での「アメリカニゼーション」が批判されるようになりましたが、同時に「多文化

主義」は米国の「解体」をもたらすという批判も高まっています。そのため、様々なエスニック・グループの文化的独自性を尊重しながら、新たな「国民統合」を実現する方が現在模索されていると言えます。

さらに、近年の経済活動や環境保護における「グローバル化」の進展の中で、「グローバル・スタンダード」の多くが米国から発進されるものである点をとらえて、「グローバル化」は同時にグローバルな「アメリカニゼーション」であるとの意見も目立ち始めています。

このように「アメリカニゼーション」という言葉は、過去の米国史における移民の同化過程でみられた古い概念のように見えながらも、現在でも新たな意味で再浮上しています。そこで、この研究プロジェクトでは、1)米

国が外国を占領や植民地化するなどして「アメリカニゼーション」を進めた事例(日本、フィリピンなど)、2)米国内部で少数のエスニック・グループを「主流文化」に同化させていった際の「アメリカニゼーション」の事例との国際比較を通じて「アメリカニゼーション」概念の批判的、歴史的相対化を目指そうとするものです。

メンバーは、油井大三郎(東京大学)を代表者とし、遠藤泰生(東京大学)、辻内鏡人(一橋大学)、佐藤勤治(獨協大学)、中野聡(神戸大学)、矢口祐人(東京大学)、阿部小涼(東京大学)など十数名で構成されています。2-3年間研究会を継続した上で、成果の出版ができればと考えています。

(ゆいだいざぶろう・東京大学総合文化研究科教授)

第5回アメリカ研究資料センター 公開シンポジウムのお知らせ

今年も恒例となりました公開シンポジウムを開催いたします。
ご期待下さい。

テーマ：グローバル化とアメリカ文化

日時：1998年11月28日(土曜日)
午後2時～5時

場所：東京大学教養学部(駒場キャンパス)
13号館1323教室

報告者：西垣通(東京大学社会科学研究所教授)
「インターネットと言語」
松本健(公正貿易センター所長)
「通商交渉とグローバル化」
山本吉宣(東京大学総合文化研究科教授)
「グローバル化と国際システムの変動」
佐藤良明(東京大学総合文化研究科教授)
「ロック音楽の異文化への浸透 日本の歌謡曲の場合」

編集後記

98年度最初のニュースレターは、昨年度から今年の前半にかけて開催されたセミナーの中からほんの一部をご紹介します。第一線で活躍する研究者にふれた大学院生たちの新鮮な感動を味わっていただければ幸いです。さて、98年度CASスタッフ一同の顔ぶれは以下の通り。小川雅弘、林雅太、星野光子、森中真弓、山本祐子(以上司書)、灰塚毅弘(事務官)、阿部小涼(助手)、遠藤泰生(助教授)、油井大三郎(教授・運営委員長)、カウンターでお会いしましょう。

(あ)



98年度センタースタッフ



アメリカ研究資料センター運営委員会(1998.4～)		
大学院総合文化研究科長・教養学部長	大森 彌	教授(センター長)
(地域文化研究専攻)	油井大三郎	教授(運営委員長)
(国際社会科学専攻)	山本 吉宣	教授
(言語情報科学専攻)	大堀 俊夫	助教授
(超域文化科学専攻)	瀧田 佳子	教授
(生命環境科学系)	友田 修司	教授
(相関基礎科学系)	岡本 拓司	講師
(広域システム科学系)	谷内 達	教授
(委嘱委員)	木村 秀雄	教授
(アメリカ研究資料センター委嘱委員)	遠藤 泰生	助教授
大学院法政学政治学研究所・法学部	五十嵐武士	教授
	樋口 範雄	教授
大学院人文社会系研究科・文学部	庄司 興吉	教授
	平石 貴樹	教授
大学院経済学研究所・経済学部	福田 慎一	助教授
	柳川 範之	助教授
大学院教育学研究所・教育学部	箕浦 康子	教授
社会科学研究所	渋谷 博史	教授
社会情報研究所	吉見 俊哉	助教授

CAS ニュースレター Vol.2 No.1

平成 10 年 9 月 30 日発行

発行:東京大学大学院総合文化研究科附属アメリカ研究資料センター
〒153-8902 東京都目黒区駒場3-8-1
TEL 03-5454-6137 FAX 03-5454-6160
http://park.ecc.u-tokyo.ac.jp/cas/
編集:遠藤 泰生・阿部 小涼

制作:メディアフロント

〒151-0053 東京都渋谷区代々木4-9-5-313
TEL 03-3373-6521 FAX 03-3373-6527